



212号

2016 / 4 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’  
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli-san.com/>  
Eメール:[wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)



「老姥姥と重外孫(曾おばあちゃんとひ孫ちゃん)」

2015年3月 上海浦東・香梅花園にて 撮影:何 媛媛yuányuánliáng gù shì(‘わんりい’媛媛讲故事寄稿中)

私の息子は結婚して今上海に住んでいます。私が大学の春休みを利用して上海の息子の家に滞在中、山西省太原市在住の、82歳になる母が‘重外孫(ひ孫)’に会いたいといって飛んできました。2世代を超えた二人の、記念のツーショットです。

‘わんりい’ 2016年4月号の目次は最終ページにあります

4月になると、初めて北京で生活するために、空港から住居のある清華大学まで車で移動している時、環状2号線の中央分離帯のフェンスに沿って、美しく咲いていた花の行列を懐かしく思い出します。色とりどりのバラのようなきれいな花でしたが、その花が、月季と言うバラの親戚筋の花だということを以前にもお話ししました。

それまでの、北京に対する私の印象は、草木が少なく、レンガ塀の多い殺風景な街というものでしたから、うらうらとした4月の陽気の中で美しく咲く花は、殊更に目に飛び込んできました。清明節の何日か前で、季節としては、ちょっと早めの暖かい日でした。後で聞くと、その時期はいつも冬と春が力比べをしていて、この日は、偶々、急に春の勢いが増した日だったようです。2000年のことですから、空気も花もきれいで、これからの北京滞在が楽しいものになる予感で、とても幸せに感じたことを覚えています。

しかし、暫く住んでみると、ところにより街路樹こそ生い茂っていますが、日本で見られるような、住宅の庭先の花や、商店街の路地裏の鉢植えの植物など、殆ど見られませんでした。不思議に思ってちょっと観察してみると、街の建物の建て方が日本とは全く違うことに気が付きました。北京の住宅は、大部分レンガや石で建てられた集合住宅ですが、1ブロック全部が建物で囲まれていて、それが小区(注)と呼ばれます。商店街でない限り、各階住宅への入り口は、1階の家でさえ、ところどころに設けられた門から入った中庭にあります。門を入ると、中庭があって、小区によっては、花や木が植えられ、快適なスペースになっています。所によっては何もなくて、殺風景なところもありますが、いずれにしても夏には住民が夕涼みに出て将棋や麻雀をしたり、歓談したりする憩いの場所になっています。

2000年頃までに完成した建物は、ほとんど敷地全体を高いレンガ塀などで囲っており、中は植物を

植えて快適にしてあっても外側は不愛想で、そんな道で雨に降られると、雨宿りもできず、仕方なく雨に濡れて歩いたこともありました。伝統的な建物の四合院が残る胡同フートンもそうです。道幅ぎりぎりまでそれぞれの四合院の高い塀が連なる道が続きます。私は、'胡同'と言う響きに、何となく惹かれるのですが、胡同そのものは、何の面白みもない埃っぽい路地です。しかし、その両側に連なる四合院が魅力的で、最近人気の胡同観光で、塀の向こう側に入り中を見せて貰うと、そこには昔ながらの生活の痕跡があり、花や緑がいっぱいで、井戸さえもある快適な空間が広がり、塀の外の風景が嘘のようです。

こんなことを知ると、中国では囲いが重要なのだと分かって来ます。以前、河北省の承德へ出かけたとき、清朝の夏の朝廷と言われた'避暑山荘'の敷地が塀で囲われているのを見ました。あまり高くはないけれど、人間の胸くらいの高さで、険しい地形に沿って塀が続いているのを不思議な気持ちで眺めました。丁度、小型の万里の長城のようでした。そういえば、万里の長城も塀には違いないですね。

また、北京市の郊外を車で走っている時、広い畑が、腰くらいの高さのレンガ塀で囲われているのを見ました。広大な畑で、見たところ人家はないので、畑だけを囲っているようでした。広い中国で、畑を囲うというのはちょっと奇妙な気がしますが、周りの異民族と国家の存亡をかけた戦いを続けてきた中国の歴史を考えれば、自分のものを囲って守るという考え方は当然のことかもしれませんね。

しかし、最近の北京市内の高層マンションは、敷地こそフェンスで囲っていますが、中の植栽や施設は外から見えるようにしています。もちろんセキュリティは万全ですが、昔の胡同とは全く違い、街並は明るくて開放的になったと思います。

**注)** 小区：辞書によっては、違う解説もありますが、北京の人たちは、1ブロックの纏まった住宅を「小区」と呼んでいます。

Rén bù zhī ér bù yùn, bú yì jūn zǐ hū  
 人不知而不愠，不亦君子乎  
 (人知らずして愠みず、亦た君子ならずや) 〈学而第一〉

うえだ あつ お  
 桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

「人知らずして愠みず、亦た君子ならずや」。人が認めてくれなくても、恨みに思わない。それもまた君子というものではないか。これは『論語』の最初の章に出てくる言葉です。「愠みず」とは、ムカついたりイラ立ったりしないということです。「いきどおらず」と訓読することもあります。自分の考えや能力を人に認めてもらいたいとは、誰しもが思うことです。しかし人はいつも自分を認めてくれるとは限らない。むしろその逆の場合が多い、というのが現実です。こういう時、たいていの人はムカついたりイラ立ったりします。その気持ちは十分理解できる。しかしこれでは君子として失格です。人から理解されなくても冷静でいられること、これもまた人の上に立つ者の条件の一つであると、孔子は考えていたようです。

また次のようにも言っています。「君子病无能焉。不病人之不知也 (Jūn zǐ bìng wú néng yān。Bú bìng rén zhī bù jǐ zhī yě)」(君子は能くする無きを病う、人の己を知らざるを病えず)〈衛霊公第十五〉。君子たる者、自分の力の足りなさを気に病むものだ。人に認められないことを気に病むものではない、と。ここに出てくる「病う」とは、気に病む、という意味です。「能くする無きを病う」とは、ただ何もしないで自分の無能を嘆くという意味ではありません。人の評価にこだわらず、ひたすら自分の目標に向かって努力する、という意味が込められています。これは孔子の生き方そのものにもつながるものです。

更に次のようにも言っています。「不患人之不知。患不知人也 (Bú huàn rén zhī bù jǐ zhī。

Huàn bù zhī rén yě)」(人の己を知らざるを患えず。人を知らざるを患う)〈学而第一〉。人が自分を認めてくれないからといって、それを気に病むこととはない。むしろ自分が人を知らないことを気に病め、と。「患う」とは、やはり気に病む、という意味です。相手から理解されないことを気に病むよりも、こちらから積極的に相手を理解するよう心掛けること。その方が大事だということでもあります。

これに似た文句は『論語』の中にしばしば出てきます。「樊迟问仁。子曰：“爱人”。问知。子曰：“知人”(Fán chí wèn rén。Zǐ yuē：“Ài rén”。Wèn zhī。Zǐ yuē：“Zhī rén”)(樊迟仁を問う。子曰く、「人を愛す」と。知を問う。子曰く、「人を知る」と)〈顔淵第十二〉。ある時、弟子の樊迟が孔子に「仁とは何ですか」と訊ねた時、孔子は「人を愛することだ」と答えました。ここで言う「人を愛す」とは、人を大事にするという意味です。更に「知とは何ですか」と訊ねると、即座に「人を知ることだ」と答えています。

孔子は春秋時代という混迷の中を生きただけの人ではありません。そしてこの混迷を解くカギを、武力ではなく、文化の力に求めた人でした。当時、孔子の真意を理解できる人は、ごく少数に限られていました。しかし多くの弟子たちがその教えを後世に伝え、今もそれは生き続けています。混迷の世を生きる時、何よりも大切なことは、人に知られるよりも人を知ること、人に愛されるよりも人を愛すること、ということでしょうか。

(わりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

昔、蛇を使う人がいました。その人は大小2匹の青い蛇を飼い馴らして、毎日町に出掛けて蛇に芸をさせては観客からお金を貰い暮らしていました。その蛇使いは、大きい方の蛇を「大青」、小さい方の蛇を「二青」と名付けていました。二青は額に赤色の斑点があり、蛇ながら頭が良く、蛇つかいの話をなんとなく全て理解しているようで、ぐるぐるくねくねと体をくねらせていつも上手に芸を披露して観客の喝采を浴びていました。そんな訳で、蛇使いは特別に二青を可愛がっていました。

或る年、大青は年齢のせいで死んでしまいました。蛇使いは大青の代わりを探そうと思い二青を連れて旅に出、夜、山寺に泊まりました。夜が明け、出発するので蛇の入った籠を覗いてみますと二青がいません。蛇使いは二青を心から可愛がっていたので、びっくりするとともにとても悲しく、辺りを必死に探し回り呼びかけましたがどうしても見つかりません。

時々草木が生い茂っているところに二青を出してやり、好きなように遊ばせることもあったのですがいつもはしばらくすると二青は自分から帰ってくるのでした。多分今度もその内戻ってくるだろうと思って待つことにしました。しかし、その日は昼まで待ち続けても二青は戻って来ませんでした。彼はがっかりし、あきらめて寺を去ることにしました。

寺を出て暫く歩いていると道路の端の雑草の中からガサゴソという音が聞こえてきました。何だろうと思って立ち止まって音のする方を見ると、二青が帰ってきたのでした。「やれ、嬉しや」と、彼は嬉さのあまり、両手で二青を抱きしめ、ようやくほっとしました。そして一息つこうと道端に座ると、二青は主人をじっと見詰め何かを話したいというような目

をしています。蛇使いは妙に感じ二青の後を見ますと、なんと、1匹の小さな蛇がチョロチョロ現われてこちらにやってきました。蛇使いは感激して二青の頭を撫でながら言いました。

「お前はちびの仲間を連れてきてくれたんだなあ。わしは、お前がわしに見切りをつけて何処かに行ってしまったと思っていたよ。ごめんなあ〜」

そうして餌を取り出し2匹にやりました。けれども、小さい蛇はまだ蛇使いに慣れていないのでしょうか。身をすくめ怖がっている様子で餌を食べようとしません。二青は口で餌を噛んで小さい蛇の口元に運びそれを食べさせようとした。その様子はまるで主人が客をもてなすようでした。

何日か日が経って、小さな蛇も蛇使いが与える餌をだんだん食べるようになりました。そして餌を食べ終

わって二青が籠に入ると、小さい蛇もその後について籠に入っていくのでした。蛇使いは小さい蛇に「小青」という名を付けて、芸を少しずつ教え始め、小青もすぐに要領を呑み込んで、間もなく二青と変わらないほどになりました。蛇使いは2匹を連れてあちこち人々に芸を披露して回り、儲けもたっぷり得られるようになりました。

一般的に蛇使いが使う蛇は長さ2尺くらいです。それより長くなると体が重くて、芸をするのには向かなくなります。ですから蛇使いは育ち過ぎた蛇は二尺以下の蛇と取り替えるのが普通です。いつの間にか二青も二尺を超えてしまいました。しかし、蛇使いによく慣れていたのでそのまま手許に置いていました。さらに二、三年経つと、二青は終に3尺を超えてしまい、籠は二青には窮屈になってしまいました。蛇使いはやむなく二青を手放すことにしました。



満柏 画

ある日、二青を連れて山に行き二青の好物の餌を与え、無事を祈って、後ろ髪を引かれる思いで二青を山に放してから帰ってきました。しかし間もなく二青は戻って来て籠の側にまとわりついて離れません。蛇使いは涙を浮かべ二青を手で追いながら叫びました。

「二青よ、行くんだ。この世には、百年も続く宴はないんだ。お前は今日からこの大自然の中に身を潜めて過ごすのだ。そしてその内きつと神龍になるんだぞ。狭い籠の中ではお前も窮屈だろう。わしもお前を追うのは辛い。わかってくれないか」

二青は蛇使いの気持が分かったかのようにようやく去って行きました。しかし、二青はいつの間にかまた戻って来ていたのです。そして今度は、いくら追い払っても、頭を籠につけて去ろうとはしません。籠の中の小青も心細がってるようでブルブル震えて動いていました。「そうか。分かったよ。二青は小青と別れるのが忍びないんだね」と蛇使いは思いました。そして籠の蓋を開けてやりました。小青は飛び出してくると、二青と首を絡ませ、舌をちょろちょろと出して何かを語り合っているようでしたが、しばらくすると二匹は並んで去って行きました。蛇使いはもはや小青も戻って来ることはないだろうと思っていると、小青だけが寂しく帰って来、籠の中に入って元気なくコロリと横たわってしまいました。

それ以来、蛇使いは二青の代わりになる蛇を探しましたが、なかなか気に入った蛇見つかりませんでした。やがて小青も大きくなりすぎて思うように芸をすることができなくなりました。蛇使いはようやく新しく一匹を手に入れ、いろいろ芸を仕込みました。しかし、どうしても小青ほどの芸を披露できるようにはなりません。

蛇使いは、薪木を採る人たちが山の中で二青を何度も見かけたという噂を聞きました。また数年経ち、二青はすでに数尺の長さになり、お椀ほどの太さになってたびたび現れては人間を襲うようになったという話を聞くようになりました。旅人達は警戒して二青が現れるという道は決して通らないようになりました。

ある時、蛇使いは人々の噂となっている場所を通りかかりますと、蛇が一匹、蛇使いの脇をまるで一

陣の風が吹き抜けたように通り過ぎて蛇使いの前に現れました。蛇使いは突然のことでびくりにして逃げ出しました。が、蛇使いは蛇が彼を追いかけているように感じ、立ち止まって振り返ってみますと蛇はもう目の前に迫っていました。が、見れば額にくっきりと赤色の斑点があるのが見てとれました。なんと二青だったのです。二青、二青だね」と蛇使いが蛇に呼びかけると、蛇は途端に動きを止め、首を持ち上げてしばらく蛇使いを見詰めると急にすり寄ってきて、昔、甘えた時のように彼をぐるぐる巻きにしました。喜んでいるとは分かっている、二青は体が大きくなっています。蛇使いはその重い蛇に巻き付かれて息が今にも絶えそうになりドサッと地に倒れました。

「お願いだ。離れておくれ」と二青に頼むとやっと放してくれました。そして二青は今度は籠に頭をすり寄せました。蛇使いは、その気持ちがすぐ分かり籠を開けて小青を出してやりました。二匹は見つめ合うと、身をくねらせて、お互いに巻き付いてそのまま長く絡みあっていましたがしばらくしてようやく離れました。

蛇使いは小青に向かって言いました。

「わしはずっと前からそろそろお前と別れなくてはいけないと思っていた。今日、お前の連れが現れてくれて安心したよ」

そして二青に向かって

「小青はお前が連れてきた蛇だ。大きくなりすぎてしまったからもうお前が連れ行ってもいいんだよ。ただ一つ頼みがある。この山の中は食べ物に不自由しないのだから、旅人を襲って神罰を受けるようなことはしないでおくれ」

と言いました。

二匹の蛇は頭を下げ、分かったと頷いているように見えました。蛇使いが二匹の蛇を追い立てるように手を振ると、二青が前を進み小青はその後に従って森の木や草を分けてシュ、シュと去って行きました。蛇使いはその場に立ち尽くしたまま二匹が去って行く様子をずっと目で追い、見えなくなってやっとその場を去りました。その後、蛇が旅人を襲うことはなくなりましたが、二匹の蛇がどこに行ったのかも知る人はいませんでした。

(終)

## 〈アルジェリア料理の会〉講師:サミラ・シェバ 於:町田市民フォーラム・調理室 2016年3月13日(日)



テーブルに並べられた色々なスパイスと食材



アーモンドブードル  
100%のケーキ

アルジェリアパン

ひよこ豆のシチュウ

3月13日(日)、『わんりい』料理の会が主催するアルジェリア料理講習会に参加しました。フランス人講師のサミラさんの実演と指導で、初めて使用する、食材や調味料の使い方を教えていただきながら、アルジェリアの煮込み料理・パンとケーキを作りました。以前からパンづくりに挑戦したいと思っていましたが、初めてのパン作りは思いもかけなかったアルジェリアのパンで、それもオーブンを使わず、フライパンでできるもので、びっくりし、感激しました。

実習では、5人が一組になり、協力して、手際よく3種の料理を完成させました。その後、『わんりい』の方々が用意してくださったサラダ・果物とケニアの香り高いコーヒーもメニューに加えられて、皆さんと一緒に、自分たちで作ったアルジェリア料理をいただきながら、おしゃべりを楽しみ、とても楽しい時間を過ごしました。

[報告と写真] 叶 霖 (ネイネイ)

[レシピは 'わんりい' HPに掲載します]

「カラズン」の表紙



アルジェリア料理の講師を務めて下さったサミラさんは、漫画の勉強を目的にフランスから日本に来ています。その漫画作品を「わんりい」の皆さんに紹介頂けることになりました。

今月号は、作品の表紙だけです。題名の「カラズン」はアルジェリア語で「桜」のことだそうです。どんな作品になるか楽しみです。

# のるか反るか・破釜沈舟

私の調べた諺・慣用句 48

三澤 統

私たちは自分より力の有る相手に大勝負を挑む時には「ここは、“のるか反るか”だ!」、「一か八(ばち)かの勝負だ!」などと言うのではないのでしょうか。勿論気合だけでなく、事前の周到な準備と、腹をくくる気概が必要なことは言うまでもありません。

さて、後に「漢楚の戦い」<sup>注</sup>で勇猛の名をとどろかせた“項羽”が、強大な秦軍と“のるか反るか”の戦いをする事になり、必勝を期してある行動をとりました。それはどんな行動だったのでしょうか。辞書では次のように載っています。

## ▲ 小学館 デジタル大辞泉：

「伸(の)るか反(そ)るか 成否は天にまかせ、思い切って物事を行うこと。 いちかばちか」

## ▲ 大修館書店 中日大辞典：

「破釜沉舟 pòfǔchénzhōu 出陣にあたり飯釜を壊し舟を沈める；のるか反るかでやる。一か八かの決心でやる」(※沉は沈の簡体字)

出自は司馬遷・史記の「項羽本紀」です。

秦朝末、各地の農民が次々と武装蜂起し、秦朝の暴虐統治に反抗しました。蜂起軍のリーダーで最も著名なのは陳勝、呉広、続い

て項羽、劉邦がおりました。以下に項羽の“のるか反るか”の戦いの物語を述べます。

有る年、秦国の三十万の軍隊が趙国の巨鹿の地を包囲しました。趙王は慌てて楚の懐王に救いを求めました。

楚の懐王は宋義を大将に項羽を副将とし、二十万の軍を連れて趙国の救済に向かわせました。ところが宋義は秦軍の勢力が強大なことを知ると、あろう

ことか、行程の半分ほどで軍を進めるのを止めてしまいました。

軍には糧食も少なくなり、兵士たちの食事は野菜と豆だけという有様でしたが、宋義は宴会を挙行しては派手な飲み食いを続けていました。これを知って項羽は大いに怒り、宋義を切り捨て、自らが宋義に代わって部隊の指揮を取り趙国を救いに向かいました。

項羽は先発部隊を派遣して、秦軍の食糧運搬道路を絶ち、自らは主力部隊を率いて、漳河を渡り巨鹿の包囲を解きました。そして、楚軍が全部漳河を渡り終えた後、項羽は兵士たちに十分な食事をさせ、各人に三日分の保存食を持たせると命令を下しました。

「舟はのみで穴を開けて河に沈めよ。鍋釜は全部粉々に砕け。附近の建物は全て焼き払え」(破釜沈舟)

項羽はこの命令を下すことによって、彼が絶対退かず、必勝を期すという強い決心を示したのです。

楚軍の兵士たちは大将の並々ならぬ強い決意を知って誰も後に退くことは考えませんでした。項羽自らの指揮のもと兵士たちは勇猛果敢、死をも顧みず秦軍に向かって突撃してゆき、連続九回もの猛攻撃

を加えて終に秦軍を大敗させました。秦軍の主将たちは、ある者はころされ、ある者は捕虜となり、またある者は投降しました。

この戦いは巨鹿の包囲を解いただけでなく、秦軍が再起できぬほどの打撃を与え、二年後にはとうとう秦朝は滅亡しました。

その後、項羽は楚の将軍に昇格し、多くの軍隊を統率し指揮に当たりました。そして彼の名声は広く天下に伝わりました。

## ■注記

漢楚の戦い：BC206年～BC202年。秦王朝滅亡後の政権をめぐり、西楚の霸王・項羽と漢王・劉邦との間で繰り広げられた。尚、本エピソードは、BC209年～BC208年の「陳勝・呉広の乱」の時の話と考えられる。



満柏 画

今回は、その1(わんりい207号)で「倭寇についてはいずれ項を設けたい」と書いたので、その約束を果たすため「倭寇」から述べていきたい。



倭寇についてはいろいろな資料で調べたが、調べれば調べるほど複雑で何から書いていけばいいのか迷ってしまった。本シリーズを書き始める前の倭寇に対する私の知識は、「鎌倉時代から室町時代にかけて中国や朝鮮半島を荒らしまわった日本の海賊」程度の認識であったが、2度の元寇も諸資料を調べるうちに私の当初のイメージとは大きく異なったように、倭寇も認識を改めなければならないことが次々として出てきた。倭寇の意味する内容は幅広く、一時期の歴史概念ととらえるのは不可能ということが分かった。

「倭寇」という文字が出てきたのは、AD404年の高句麗19代の王である「広開土王<sup>注</sup>」碑文が最初である、とネットに出ている。また豊臣秀吉の朝鮮出兵も倭寇と呼ばれ、近年に至っては日中戦争においても中国では日本軍を倭寇と呼んだようだ。つまり「倭寇」とは中国人や朝鮮人がつけた呼称である。今回取り上げるのは中学高校の教科書にも載っている13世紀から16世紀にかけて朝鮮半島や中国沿岸を荒らしまわった海賊、あるいは私貿易・密貿易を行う商人たちのことである。「寇」という字は(その1)で書いたように、中日辞典では「①強盗、②侵略者」と出ている。お互いに「元寇」だ、「倭寇」だと言っていると言えようか。

倭寇を語るとき、「前期倭寇」と「後期倭寇」に区別するのが一般的である。両者は活動した時期、構成員、

時代背景などがことごとく異なっているのである。まず前期倭寇から始めよう。時期は13世紀後半から14世紀にかけてである。つまり鎌倉時代から1333年の鎌倉幕府滅亡後の南北朝時代にあたる。中国は元(1279年～1368年)であり、朝鮮半島は高麗王国(936年～1392年)が治めていた。次に構成員は、壱岐、対馬、松浦地方の土豪、漁民、商人が中心で、これに高麗の海賊が加わり主として朝鮮半島沿岸を荒らしたようだ。高麗王国はこれに手を焼き、衰退を早めたとされ、1392年に李氏朝鮮に取って代わられてしまった。この李氏朝鮮を建国したのは「李成桂」という人物であるが、この男は高麗王国の武将で倭寇に大打撃を与えるなど倭寇討伐に名声を得た人なのだ。下剋上ということか。

倭寇の原因や背景は諸説あるが、後期倭寇は別として前期倭寇は少なくとも元寇に対する報復をまず挙げられるであろう。壱岐や対馬の住民に対する元の横暴ぶりや残虐性は筆にするのが憚られるほどのひどさであった。また捕虜にして元や高麗の奴隷とされた人も多く、当然奪還のため朝鮮半島に向かったと思われる。背景としては一つには、2度にわたる元寇により元と高麗のかなりの船が沈んでしまい、中国や朝鮮半島沿岸警備も手薄になっていたことが挙げられる。さらには日本の政治状況は、鎌倉幕府の弱体化から南北朝時代に入り、密貿易や私貿易を取り締まれる体制になかったことも倭寇の跳梁跋扈を許すことになったといえよう。

前期倭寇が衰退して行ったのは、1392年に南北朝が統一され1404年に室町幕府の足利義満による

## ■倭寇の時代

	時 期	主な構成員	時代と政権	王朝の継続年数
前期倭寇	13世紀後半～ 14世紀	日本人 (壱岐・対馬・松浦地方)	日本、鎌倉～南北朝 中国、元	<ul style="list-style-type: none"> <li>元(1279～1368年)</li> <li>明(1368～1644年)</li> </ul>
後期倭寇	15世紀後半～ 16世紀	中国人、朝鮮人	日本、室町 中国、明 朝鮮、李氏朝鮮	<ul style="list-style-type: none"> <li>高麗(936～1392年)</li> <li>李氏朝鮮(1392年～1910年)</li> </ul>

「勘合貿易」が始まったこと、また同年に既述のように朝鮮半島は「李氏朝鮮」が建国され両国の政治体制がしっかりしたことによる。またこれより先、さしもの元は1368年に明に取って代わられた。その明の洪武帝は「海禁政策」をとった。3か国の態勢確立により前期倭寇は収まっていったのである。

しばらく平穏に見えた東シナ海周辺は、15世紀後半からまた密貿易や私貿易が始まっていた。明の海禁政策の中でひそかに密貿易で利益を得ようとする中国商人や日本商人が幅を利かすようになったように思われる。室町幕府も弱体化していきはじめ1467年には応仁の乱がおこり戦国時代となっていた。国が乱れると当然のように倭寇が復活した。「後期倭寇」である。しかし後期倭寇の主役は、中国人、朝鮮人が多数を占め、この一部に日本人が加わった。つまり中国人・朝鮮人による中国沿岸の侵略といっても過言ではない状況となったようだ。後期倭寇にも原因に諸説があるが、その一つに明に抵抗する勢力の扇動説があるという。つまり元のあとの明に服さぬものが日本に亡命して、日本の島民を集めて攻め込んだというからややこしい。やはり歴史は重層的であり一つや二つの定義の枠にはほとんどの事例がはまらないのではないだろうか。

「後期倭寇」は、1588年に豊臣秀吉が「倭寇取締令」を発令して終わった。参考までに前期倭寇と後期倭寇の比較表をご覧ください。



ここで倭寇とは直接は関係ないが、「刀伊入寇」という本の紹介をさせていただきたい。過日、わりりの会員のYさんが私に、「元寇とは関係はありませんが、この本を読まれましたか」と尋ねられた。まだ読んでいなかったので早速、書店で求めると葉室麟の史実に基づく小説で、「藤原隆家の闘い」と副題がついていた。

「刀伊」とは、広辞苑によると次のように書かれている。

【朝鮮語で夷狄(未開の部族、野蛮な異民族)の意。高麗人の呼称をそのまま襲用したもの。今の中国黒竜江省方面を占居した女真人。1019年に筑前、壱岐、対馬などに入寇。わが国ではこれを「刀

伊の賊」といった】。

つまり元寇から遡ること250年余り前に、九州北部沿岸は女真人グループに一方的に攻め込まれているのである。私はこのような歴史があるとは全く知らなかった。世の中は知らないことが星の数ほどあるものだ、と改めて思った。この時も「刀伊」は壱岐・対馬を蹂躪しその勢いで北部九州を侵略してきたのである。「遠の朝廷」と呼ばれた大宰府を目指し、略奪をほしいままにしたが最終的に大宰府を擁護していた官人が撃退した。この時の日本側の総大将がわざわざ京から志願して九州に出向いた藤原隆家であった。

女真人とは、中国東北部から沿海州地方に住んでいたツングース族の一派である。「遼」から独立し1115年に阿骨打という首長が「金」を建国した。後の清朝を興した満州族も同一種族である。金は「遼」や「北宋」を滅亡させ一時は中国の北半分を領有したが、1234年に「モンゴル」が金を滅ぼした。この地域も栄枯盛衰が目まぐるしい。しかし故地に残留していた女真は元に服属することになった。実は元寇に女真兵が加わっていたという。元の蒙古族と金の女真族は別の民族であるが、どちらも元来遊牧民族であり居住地域が隣接しているためどこかでつながっているような気がしないでもない。いずれにしても11世紀初頭から13世紀末までに、日本(壱岐・対馬・北部九州)は2度、3度と大陸からの侵略を受けていたのである。なお1419年には李氏朝鮮による「応永の外寇」で倭寇の本拠地とみなされた対馬が攻められ船舶129隻を焼き払われるなどの被害を受けたが、大規模な戦いに発展しなかった。

おわりに「刀伊入寇」の巻末にある、この本のPR文を記しておきたい。

【時は平安中期。貴公子・藤原隆家は陰陽師・阿倍清明から「あなた様が勝たねば、この国は亡びます」と告げられる。叔父・藤原道長との熾烈な政争を経て、九州大宰府に赴いた隆家を待っていたのは、大陸の異民族「刀伊」の襲来だった——直木賞作家が実在した貴族の知られざる戦いを描く、絢爛たる戦記】

(一部略)

(つづく)

注)広開土王：高句麗19代の王・好太王(374年～412年)を指す。

## ▶ 生まれた町ヴィヤリストクとは

ザメンホフが生まれ育った当時のヴィヤリストクは、帝政ロシアの支配下にありました。現在そこは、ポーランドの地で、ベラルシーの国境に近い東部に位置し、またリトアニアにも近いところですが、そのため、ザメンホフをポーランド人として誤って記述されていることもあります。彼はユダヤ人の両親の下に生まれました。父は教育者でしたが宗教にこだわらず、いわば無神論者です。しかし母親はユダヤ教を信仰していました。この両親の長男として、ルドヴィーコ・ラザロ・ザメンホフは、1859年12月15日に生まれました。その後、4人の息子と3人の娘が生まれました。

ヴィヤリストクにいた多くのユダヤ人たちは、イディッシュ語を使っていました。それはドイツから東欧に来たユダヤ人たちが使っている言葉で、ある革命家は「崩れたドイツ語」と揶揄したように極めてドイツ語に近いもので、主にロシアや東欧圏のユダヤ人の共通語でした。

『屋根の上のヴォイオリン弾き』という有名なミュージカルがあります。その原作がイディッシュ語で書かれた小説『牛乳屋テビエ』です。作者であるショレム・アレイヘムはイディッシュ語でいくつもの作品を書きました。この小説の舞台はウクライナです。当時のオデッサ(ウクライナ)やワルシャワ(ロシア領ポーランド)、そしてミンスク(ベラルーシ)などにいたユダヤ人の多くはイディッシュ語を使っていました。

## ▶ 4つほどの言語が行きかう町

ヴィヤリストクの市場や通りでは、支配者の言語であるロシア語が大手を振る一方、ポーランド語やドイツ語、そして多数派であったユダヤ人たちが話すイディッシュ語など、それぞれの民族の言葉が違いため、ちょっとした買い物でも誤解が生じ、人々

の間ではいつも喧嘩が絶えませんでした。とりわけユダヤ人たちは工業や商業分野で活躍しましたが、独自の信仰を持つ人や独特の服装をする人などもあり、周囲のキリスト教徒たちから蔑まれていました。

喧嘩になると野次馬が集まってきます。警官が仲裁に入ると田舎から出てきたリトアニアの女がリトアニアの言葉で文句を言います。警官にはその言葉はわかりません。「ここはロシア皇帝の領土だ、ロシア語で言え！ 百姓言葉はダメだ」と警官が威圧的に言うと、「それは違う！」と、ポーランド人が叫ぶ。その男はたちまち捕まり、銃剣に取り囲まれ連れていかれます。周囲の人たちはじっと黙っています。ポーランド人たちはみんなこの男に敬意を表します。しかしドイツ人やユダヤ人は脱帽しません。「これで、あいつは俺たちに毒づくのをやめよう」と、あごひげのユダヤの老人はつぶやきます。ポーランド人は怒りに燃え、ロシア人の目には嘲りが浮かびます。

ラザロ少年は小さい時からこの様子を見て悩み、「人間はみんな兄弟だと教えられていたのに」と思い、「今に大きくなったら、きっとこの不幸をなくしてみせるぞ」と絶えず独り言を繰り返す少年でした。言葉が通じないために争いや誤解が生まれる状況を見て育ったザメンホフは、そこから一つの言語への夢をはぐくんでいくのです。

## ▶ 人類のための共通語を！

その後ザメンホフ一家は、ヴィヤリストクからワルシャワに移り、ザメンホフは選ばれてモスクワ大学医学部に入学します。同級生には、後に作家になったチェーホフがいました。しかしユダヤ人故に家庭教師にもなれず、学費も続かなくなりワルシャワに戻りました。1881年の夏のことでした。

混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義「私は人類の一員だ！」(II)  
ザメンホフはどういう人だったのか

ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おもしろいよしひろ)

その年のクリスマスのワルシャワで、ユダヤ人への大虐殺（ポグロム）が起きました。ザメンホフ一家は3日間、地下室に隠れ、なんとか命拾いをしました。ザメンホフはこの悲痛な体験をし、改めて現実には甘くないと思いました。しかし、人類のための一つの言語の夢をどうしても捨てることができなかつたのです。

現実には、ポーランド人はロシア語を嫌い、ロシア人はドイツ語を好まず、ドイツ人はフランス語が堪えられない。フランス人は英語を受け入れないだろう。そういう現実を見るほどに、より世界共通語の必要性を感じました。

諸民族がお互いによく知り合い、人々が自由に意志を通じさせれば、他民族の人たちも自分たちとまったく同じ人間であることがわかるだろう、とザメンホフは改めて思ったのです。

自分の母語は大切だが、世界共通語は民族の壁を超えて使うところに意味がある。その言葉は、あらゆる人々にとって易しくなければいけない。そのためには、現存のどんな民族言語にも頼らない中立性を持っていること、発音がやさしいこと、文法は規則的で例外事項は存在しないことなど、ザメンホフはいろいろ考えた末、語彙については語根の大部分をヨーロッパの諸言語から採用しました。ラテン語にもよく通じ、ロシア語やポーランド語なども話せたザメンホフは苦心に苦心を重ねて人類の共通語、エスペラントを創りました。

この言葉はどちらかといえば、イタリア語やスペイン語を母語にしている人にとってはとてもやさしいでしょう。現に私はかつてルーマニアのブカレストだったか、地元のある青年にエスペラントの本を見せたところ、彼はだいたいわかると言いました。ルーマニア語はイタリア語やフランス語などのラテン語系ですから当然といえば当然です。後に詳述しますが、日本や中国でもエスペラントは普及しましたが、アジア人よりヨーロッパの人々の方がエスペラントを学びやすいことは確かでしょう。

こんなエピソードがあります。私の友人がインド人にエスペラントなるものを話したところ、アジアの大国であるインドと日本の言葉を基礎に世界共

通語を創ったらどうかと言われたそうです。しかしヒンズー語と日本語を基に共通語は作れるでしょうか。とても至難のことだと思います。

### ▶ レフ・トルストイやロマン・ロランも共感

何度もポグロム（大虐殺）を受けたユダヤ人たちは一致団結して自分たちの国を創ろう、それしか自分たちを守ることが出来ないとシオニズム運動を起こします。しかし前号で紹介したようにザメンホフは、シオニズムはユダヤ民族主義である、とはっきりとわかってきたので、一時共感したシオニズム運動とも決別しました。

シオニズム活動を通じてザメンホフは、各地から来たユダヤ人たち同士がお互いに共通の言葉がないのを改めて痛感しました。西ヨーロッパなどにいるユダヤ人たちにはイディッシュ語は通じず、エスペラントを世界各地から集まったユダヤ人たち同士の共通語にしたいとも思っていたようです。

1887年、ザメンホフはついに「インテルナツィーア・リングヴォ」(国際語)を、エスペラント博士という名前で発表しました。エスペラントは、〈希望する人〉の意味です。彼はヨーロッパ社会に影響のある知識人らにこのパンフレットを送りました。数年後、ロシアの文豪、レフ・トルストイから「エスペラントを普及することは地上に神をつくることである。これこそ人類の理想だ」という手紙を受け取りました。またロマン・ロラン、マクシム・ゴーリキーからも称賛の手紙をもらいました。

そうした多くの知識人などの影響もあり、徐々にエスペラントは浸透し、1905年にフランスのドーバー海峡に臨むブローニュ・シュル・メールで第1回「世界エスペラント大会」を開くまでに至りました。世界各地から688人の人々が集まりました。集まった人たちはお互いにエスペラントで話しました。お互いの意思がエスペラントですべて通じることを知ったザメンホフは感激しました。

こうしてエスペラントはヨーロッパに広がり、また日本や中国の人々にも徐々に共鳴者を生み出していくのです。(続く)

※参考文献は最終回に列記します

## 東西文明の比較 (3)

陽光新聞社・顧問  
塩澤宏宣

前回、世界の文明がいくつかあったか、について書きました。次に復習してみます。

「多くの学者による試算はいろいろあるが、主要な文明は12存在し、そのうち7つ(メソポタミア、エジプト、クレタ、古代ギリシャ、ローマ、ビザンティン、中央アメリカ・アンデス)はもはや存在していない、5つ(中国、日本、ヒンドゥ、イスラム、西欧)が存在する」。日本文明は、日本固有の文明として認識され、中国文明から派生し西暦100ないし400年の時期にあらわれたとする・・・」

太平洋の片隅にある小さな島国・日本の文明が数千年を経て、「世界の文明」の一つとして世界の学者たちが認めていることに誇りを感じるのは私だけでしょうか。

そこで今回は、日本文明について書いて見ます。「世界の中の日本文明」は、中国文明の影響を受けて西暦100年から400年に生まれたとの事ですが、日本には、旧石器時代を経て縄文・弥生時代があります。そのすばらしい文明を土台にして中国文明が移植されたことを忘れてはいけません。

### 日本史の誕生について

国際化が進む21世紀、世界の様々な文化との接触が多くなり、日本人は自らのルーツを求めその歴史の軌跡を確かめる気運が増えてきました。世界の中の日本、アジアの中の日本、そして日本人とは？

日本列島における歴史の幕開けには文献資料はありません。そのために遺跡や遺物の調査・研究を進める考古学、ヒトの足跡を研究する自然人類学や言語学・民俗学・生態学・作物学など様々な研究分野を総合的にまとめる必要があります。

では、日本人とはどのような民族なのでしょう。今日でいえば「日本語を母国語で話し、伝統的な日本文化を身につけ、自らを日本人だと思っている人」と定義するひとつの民族集団(エスニック・グループ)です。

新人といわれる人類がアフリカ大陸で誕生したことは定説になっています。その新人はその後ヨーロッパ大陸、ユーラシア大陸へ拡散してインド・インドシナへ、そしてシベリア経由でアメリカ大陸や中国へ到達しました。日本列島が現在のように大陸から分離する以前の気候はウルム氷期といい、約7万年前から1万年前まで続く超低温期でした。平均気温は現在より7度ほど低かったとされています。当時の東京が今の札幌、鹿児島が青森だと思えば良いでしょう。そのような厳しい自然環境の中でも日本人の祖先は生存して「旧石器時代」を築いていました。

日本列島に残る遺跡からは多くの石器類が発掘されています。中国大陸からは動物群の移動があり、マンモスはシベリア、サハリンを経て北海道へ南下し、ヘラジカ・ヒグマ・野牛などは本州まで到達しました。他方、大陸北部に分布したナウマンゾウ・オオツノジカ・ニホンジカが朝鮮半島を経由して西日本へ移住しました。当時のハンターたちはそれらの動物を追って東方へと進み、現在の日本列島へ到達したのでした。

重要なポイントは「アジア大陸からの日本に至るルート」として、「シベリア経由で北海道・東北地方へ到るルート」と「朝鮮半島経由で九州・西日本へ到るルート」の2本があったことです。そしてこの2つのルートから移入してきた文化はやがて関東・中部地方で交わりますが、日本列島には人々が移動してきたルートによって2つの文化圏ができました。このことは、その後に続く旧石器の分布状態でも見られますし、縄文時代、弥生時代、古墳時代、そして現代に至っても2つの文化圏の相違が多数あります。

そして、最近の研究では、縄文人のDNAが東北地方と関西地方では異なるということが証明され、

同時に弥生時代までの日本列島における文化の発展は東北・関東で高かったことが分かってきました。古墳時代の頃から九州及び関西の文化の進展が高くなっているのは、その時代に大陸交流が盛んになったことが影響しているのだと思います。

現在、「日本的」と考えられている文化の特色の中の多くのものが、中世または近世に起源していますが、それらの特色の基礎には、有史以前に遡る素朴で基本的な文化の伝統も存在しています。これを「基層文化」と呼ぶのですが、日本固有の「カミ（神）信仰」、歌舞伎や能の「民俗芸能」や日本民家の「高床・ハンギングウォールの構造」、そして稲作を基とする食事、日本語の基となった縄文語や倭人語なども「基層文化」の一端といえるでしょう。

### 日本列島は約3万年前に始まった

日本列島の文化遺跡からは10万年以前の石器などが発掘され、人類が存在したことがわかってきました。日本列島の土壌は酸性であるため、その頃の人骨は残っていませんが、3万年以降の後期旧石器時代の人骨は静岡県豊橋市の牛川町、浜北市、三ヶ日町などから発掘されています。また、大分県聖岳洞窟からは14,000年前のものと推定される旧石器と一緒に人骨が出土しました。研究者によると、この人骨は骨が厚く、後頭部の形などが北京郊外周口店の上洞穴出土の上洞人骨に似ているということです。

更にその後、沖縄本島の具志頭村港川の発掘調査で発掘された人骨は約18,000年前のものと判明しました。これらは華南の柳江人（広西壮族自治区柳江県）に類似しているとのこと。おそらく氷期に海面が低下した時期、古モンゴロイドの一部が、中国大陸南部から沖縄や西日本に移住したのだと思われます。また、一方ではこの古モンゴロイドが沿海州方面から北海道・東北地方へ流れ着いたということも証明されています。この2つの古モンゴロイドの集団はそれぞれ異なる文化を担い日本列島に住みついて、その後の縄文時代を築く「原日本人」となったとされています。

### 日本の旧石器文化はいつ頃から始まったのか

1949年に考古学に興味を持った一人の青年によって群馬県桐生市に近い「岩宿」遺跡から発見された一片の石器から日本旧石器文化の探究が始まりました。岩宿遺跡から出土した土器は、24,000年以前のもものと確認され、この発見以来、日本全国では3,000か所以上の旧石器の遺跡が発見されています。「旧石器文化」という呼称は、ヨーロッパでは約1万年以前の時代と文化を指す言葉として定着しており、アフリカ・インド・東南アジア・中国などでも同様に定着されています。

日本列島での最古の遺跡は宮城県北西部の江合川流域に連なる「座散乱木・馬場壇・中峰遺跡」で、約14,000年以前のもので、発見された石器にはナウマンゾウやオオツノジカの脂肪が付着しており、また動物の角や骨、皮や肉の加工・調理の痕跡が認められています。狩猟生活を営むための貴重な道具として使用されていたのかもしれない。これらの石器を使用していたのは、地質学でいう中期更新世（プライストシーン：氷河時代）にあたる時期で「旧人」の生存する時代です。北京原人と同じ原人が日本列島にも存在していたのでしょう。この時代の海面は現在より100～70mほど低かったため、現大陸から容易に日本列島に来ることができたと思われます。

当時、日本列島の自然は現在とは全く違っていました。東北から中部地方の山地は亜寒帯性の針葉樹林に覆われており、一方、関東・東海から西日本地方の低地は冷温帯落葉広葉樹林に覆われていました。長野県北部の野尻湖立ヶ鼻遺跡（40,000～24,000年前）からはナウマンゾウとオオツノジカ、岩手県南部の花泉遺跡（20,000年前）からは野牛やオオツノジカ、ナツメジカなどの獣骨が発見されています。また、花泉遺跡からは中国北部から北上した動物群とシベリアから南下したものが共存していたことも分っており、日本列島への道筋が2本あったことがこれらの事実でも証明されるといえるでしょう。

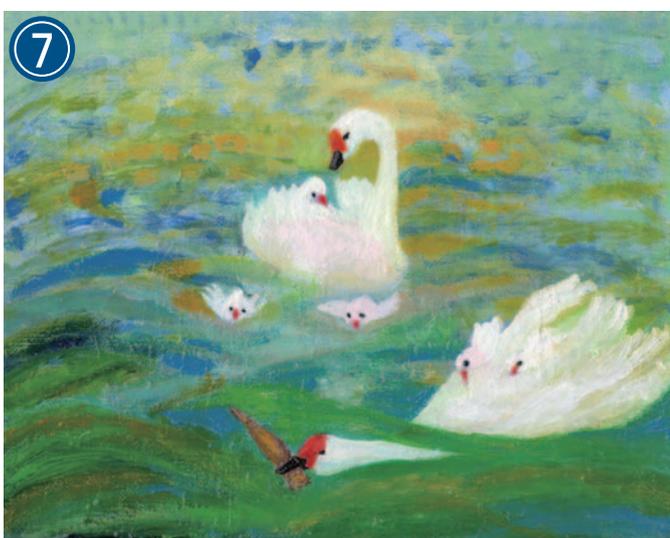
（次号に続く）

# 白鳥 (下)

絵と文=佐藤 紀子(張怡申)  
校閲=佐藤香林

⑥  
よぞらには、みかづきがきれいにひかっています。  
こどもたちは、ママのつばさにだかれてねます。  
パパとママは、そっとささやくのです。  
「よくねむるんだよ～」

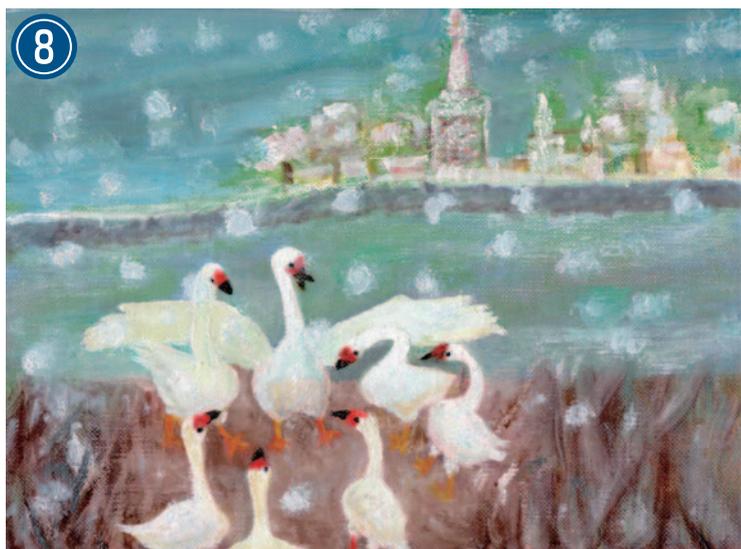
夜空上的弯月闪着明媚的光。  
孩子们睡在妈妈翅膀的拥抱中。  
爸爸妈妈轻轻地对孩子们说：  
“睡好，睡好～”



⑦  
パパはこどもたちに、たべもののあるところをおしえました。  
「こういうところに、おいしいものがあるんだよ～」  
ほかのこどもたちがさげびます、  
「わあー、いいな！ぼくたちもパパのせなかにのりたーい！」

爸爸告诉了孩子们哪里有食物。  
爸爸说，  
“这样的地方有好吃的东西。”  
别的孩子们叫道，  
“真棒真棒，我们也想去爸爸的背上。”

⑧  
こうして、こどもたちはおおきくなりました。でもふゆがやってきたのです。  
ふゆのシベリアはいちめんこおりがはって、たべものがなくなります。パパはこどもたちにいいました。  
「きみたちはこれから、じぶんのつばさをひろげて、いっしょに、とおいにほんにとんでゆかなくてははいけない。にほんはうつくしいくにで、おいしいたべものがたくさんあるんだよ」  
つづけてパパはいいました。  
「そこでふゆをすぐすのだよ」



就这样，孩子们长大了。冬天终于来了。西伯利亚冬天被冰雪覆盖着，没有的。爸爸对孩子们说，“从现在起，你们要张开自己的翅膀一起飞向遥远的日本。那是个漂亮的国家，那里有很多好吃的东西。”爸爸又说，“我们要在那里过冬。”



9

9

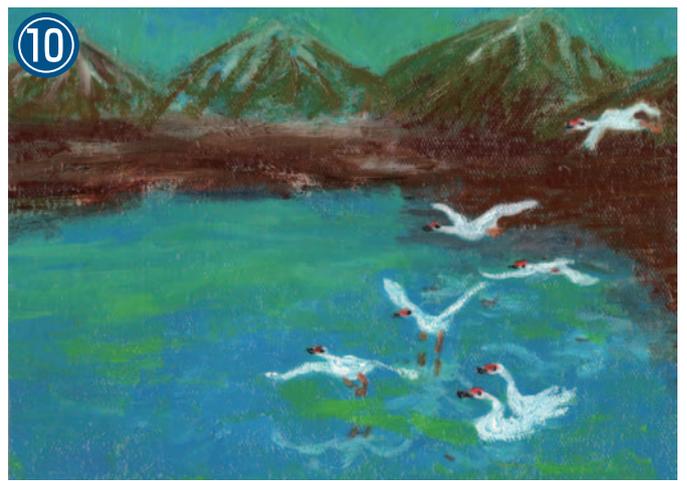
こどもたちは こえをそろえて  
こたえました。「はい、わかりました」  
つばさをひろげると、みんないっせ  
いに にほんにむかって とびたつた  
のです。でも こどもたちは ふあ  
んな きもちでいっぱいでした。  
「にほんっていったい、どんなところ  
なんだろう？ どれほど とぶんだろ  
う？」  
「それに、ともだちができるだろ  
うか？」

孩子们齐声回答说：“好，知道了。” 孩子们一起张开双翅，向日本飞去。可是他们心里充满了疑惑，“日本到底是个什么地方呀？要飞多长时间呀？” “还有，那里有没有朋友呢？”

10

つよいかぜのなかをとび、  
いくつもの ちやいろのやま  
をこえました。  
パパは はげまします。  
「しっかりつばさをひろげて  
とびなさい！」

穿过 强风飞越连绵  
的茶色的山。  
爸爸鼓励孩子们说，  
“鼓足劲，向前飞！”

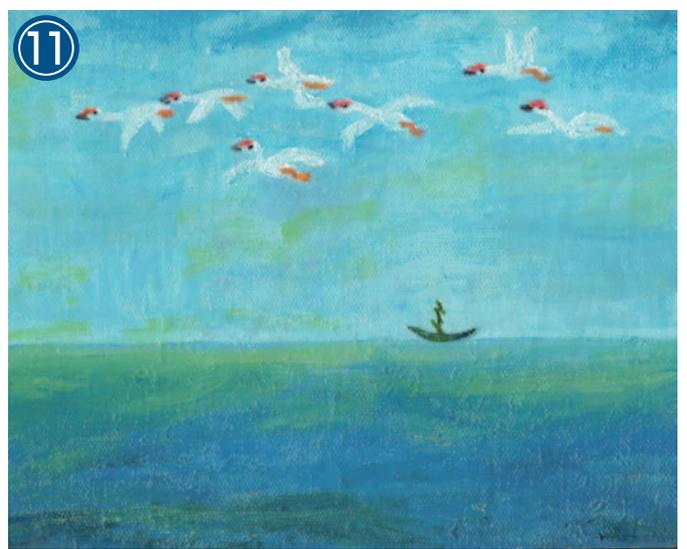


10

11

うみにはときどき、ふねがうか  
んでいました。あおく ひろび  
ろとした うみをこえました。  
でも こどもたちのつばさ  
が よわってきたのです。  
ママはなぐさめます。  
「つかれたでしょう。もうすこ  
しだから、がんばってね～」

海面上漂浮着时  
隐时现的船只，  
越过了这片蔚  
蓝的大海时，  
妈妈说，  
“你们累了吧。  
已经不远了，  
加油～”



11

⑫

三しゅうかんかけて、やっとみどりのにほんに つきました。

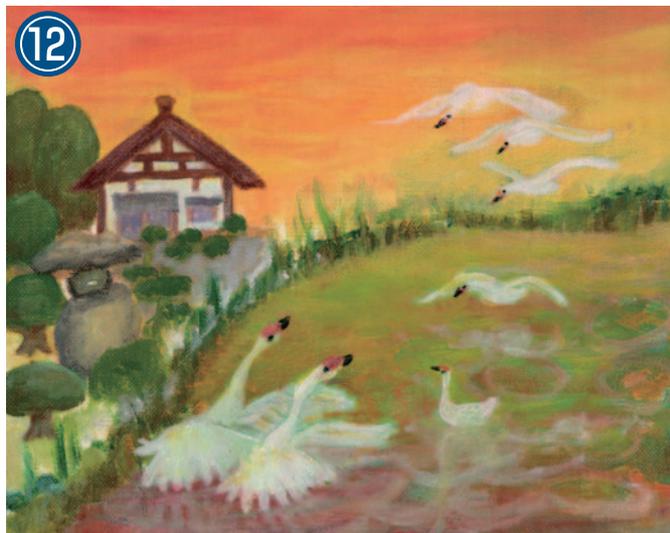
こどもたちは くちぐちに さげびました。

「あー、やっとにほんに ついたんだー！」

三个星期后，终于到达了绿色的日本。

孩子们齐声叫道：“呀啊，已经到了，到了日本了”。

⑫



⑬



⑬

そらには まんまるのおつきさまがひかっています。

にほんのよるは ふるさとシベリアよりもずっとあたたかく、みんなそろってぐっすりねむりました。

天空上闪烁着圆圆的月亮。

这里的夜晚比西伯利亚暖和。大家围在一起睡得很香。

⑭

あさ はやくめがさめ、きれいなかわに きました。

なかまのはくちょうが たくさんいます。こどもたちは いっせいに かわにはいって あそびます。

水しぶきがあがり、なみがたち、ひかりがキラキラおどります。

パパとママは たのしそうにおよぐこどもたちをみて、とても しあわせな気持ちになりました。

こどもたちのこえが きこえてきます。「みずがとってもあったかい。えさもたくさんあるよ」

⑭



早上早早地醒来，去了美丽的河边。孩子们一起跃进河里玩。这里有很多白天鹅伙伴，水花飞溅，微波荡漾，光亮闪烁跳跃。爸爸妈妈高兴地看着孩子们游水，听见孩子们说，“河里真暖和，吃的也很多呀。”它们觉得很幸福。



15

15

田んぼにいて こめつぶ  
をひろい、おがわで やわ  
らかい わかくさをたべ、  
ながれから、あおくすき  
とおった おいしいみずを  
のみました。

去稻田里捡些稻粒，  
再吃吃小溪里的嫩草，  
喝喝清甜的流水

16

ふゆがおわり、はるになりま  
した。パパが いいました。  
「ふるさとに かえるとき  
がきたよ」  
こどもたちは くちをそろえ  
て こたえます。  
「ハイ、わたしたちは から  
だもおおきくなり、ちから  
も つよくなりました」  
はねをひろげて、みんなでう  
たうのです。  
「ありがとう、にほん！ わた  
したちは ここですばらしい  
ふゆを すごしました」

冬天过去了，春天  
来了。爸爸说，  
“到了该回故乡的  
时候了。”  
孩子们一起伸开双  
翅，齐声说，  
“好，我们也都大  
了，也有劲了。”  
大家唱起了歌。  
“日本，谢谢你。  
你让我们过了一个  
好冬天。”



16



17

17

さようなら、にほん！。わた  
したちは このすてきなおもい  
でを わすれないでしょう」  
いっせいにとびたちながら、  
にほんよさようならと わかれ  
のこえをあげます。

大家一边起飞，  
一边向日本道别，  
“再见，日本。  
我们不会忘记  
这段美好的日子。”

18

にほんのひとびとは、そ  
らを見あげ、みんなこう  
ねがいながら はげますの  
です。  
「さようなら、はくちょう  
さん！ らいねんもまた、  
きてくださいね～」

日本的人们望着天空，  
说着自己的愿望；  
“再见，白天鹅。  
请你们明年再来。”



18

## フィリピン滞在記 ⑫---5月は「恋の季節」ならぬ「政治の季節」

為我井輝忠

フィリピンでは最近街を歩いていると、あちこちで選挙ポスターを目にする。時折大きな宣伝カーが立候補者の大きな顔写真を載せ、大きな音響で音楽を流しながらやって来る。驚いたことには、車からうちわやキャンディなどがばらまかれることである。見てみると、けっこう大きな大人の方がそうしたものを拾って喜々としている。ただ、日本のような公約をまくし立てる候補者の街頭宣伝の如きものはなさそうである。

6年に1回の割で、間もなく選挙の季節がやって来る。フィリピンでは今年5月に6年の任期終了に伴い、大統領、副大統領および上院議員の半数に当たる12名と3年の任期終了の下院議員292名、地方自治体(州知事、副州知事、州議会議員、市長、市議会、町長、副町長、町議員)の選挙が5月9日(月)に同時に実施される。本年度は村(バラングイ)の選挙も行われるが、バラングイ選挙日程は、統一選挙が終わった後に公表される。

さて、これからは大統領選挙を中心にしていきたい。フィリピンでは大統領候補となるためには、「フィリピン人の両親」、「10年以上連続してフィリピンに住んでいる」という2つの条件がある。

3月13日の時点では、大統領候補はManuel Roxas II (マニユエル・ロハス)、Rodrigo Duterte



私が住んでいるダグーパン市の市議会議員に立候補している候補者のポスター



大統領選挙に立候補している4人の候補者たち(左から、ポー、ビナイ、ロハス、デュテルテの各氏)

(ロドリゴ・デュテルテ)、Jejomar Binay (ジェジョマール・ビナイ)、Grace Poe (グレース・ポー)の4人に絞られている。2月に開かれた公開討論会にはミリアム・サンチャゴという女性候補も登場していたが、その後脱落したようである。

個々の候補者を紹介したい。まず、前内務・自治相のロハス候補は、現在の100ペソ紙幣に印刷されている、第2次世界大戦後に成立したフィリピン第三共和国の初代大統領Manuel Roxasの実孫にあたる。アメリカの大学を卒業後、同国にとどまり働いていたが、勤務先の銀行のフィリピン進出に伴い1991年帰国した。2年後、実弟の死亡により下院議員の補欠選挙で当選を果たす。米国での豊富な人脈と経験を生かして、通商産業省長官、エネルギー省長官等を歴任している。前回の大統領選で立候補しようとしたが、同じ自由党の現大統領のアキノ氏が公認を得たことで断念したが、今回はアキノ氏の後任として立候補している。ビジネス界の支持が強い。

デュテルテ候補は、フィリピンの他の政治家と同様政治家一家の威光の元で生まれ、父親はダバオの州知事であった。彼は弁護士としての資格を持っているが、犯罪者と薬物と闘う人の代名詞になっていて、自警団を用いて過激な地域の治安回復を図ったやり方からマスコミ等にはダバオ処刑団(Davao Death Squad)と揶揄されている。国連からは、世界の都市

**選出されるポジションの定員と任期及び再選規定**

ポジション	定員	任期	再選規定
大統領	1名	6年	なし
副大統領	1名	6年	2選まで2回(連続2期不可)
上院議員	12名	6年	3選連続3期(3年毎半数改選)
下院議員	292名	3年	3選連続3期
地方行政	約16,000名	3年	3選連続3期

注) 上院議員、下院議員、地方行政とも連続3期を超える再選は禁止しているが、1期以上の期間を開けての再選には制限がない。

**■ 選挙日程は次の通り。**

**▲ 選挙キャンペーン：**

大統領、副大統領、上院議員→2016年2月9日～5月7日

下院議員、地方行政→2016年3月26日～5月7日

**▲ 銃器や酒類に関する禁止期間：**

銃器の携帯禁止→2016年1月10日～6月8日

酒類の販売禁止→2016年5月5日～5月9日

の中で9番目に安全な都市と認定されているが、その背景には、犯罪者や麻薬密売者、反政府活動団体に対して、法的な手続きを無視した取り締まりをしているからだと言われている。彼は富裕層に人気があり、アメリカの共和党のトランプ氏とよく似ており、「フィリピンのトランプ」などと評されている。

ビナイ候補は、2010年の副大統領選に出馬し、エストラダ大統領とタックを組んで当選した。また、マカティ市長としても最長の就任期間を通じて、市の発展に大きく寄与したが、その一方で、不正な蓄財疑惑も持たれている。彼の家族は典型的な世襲政治家一家で、娘は上院議員、息子はマカティ市長である。貧困層に人気があるが、最近のニュースで不正に蓄財した金を香港の銀行に移したという事実が発覚し、今後の選挙戦に影響を与える模様である。

最後のポー候補はどの政党にも属さず、独自に立候補しているが、彼女は大統領候補となるための条件が不明だとして最高裁で争われた。フィリピンの両親の元での出生と10年以上フィリピンに住んでいることが明確でないとされてきた。しかし、それらは何とかクリアしたようである。彼女は孤児として教会で拾われ、神の恵みと言う意味で“Grace”と名づけられ、その後、フィリピンの有名な俳優夫妻の養女となり、米国での教育(ボストン大学)を受け、しばらく教師として同国で働いていた。ところが2004年の大統領選挙の際、アロヨ大統領候補の公金が選挙資

金への流用された疑惑が持たれ、その対抗馬として立候補した父親のフェルナンド・ポー氏の応援のために帰国した。帰国後、自由で公正な選挙の実施を呼びかけるキャンペーンを行い、2013年上院議員に政党の支持を受けずに独立候補として、トップ当選している。政治家としての経験に乏しいこととフィリピンの両親から生まれたとの証明が出来ない点を反対勢力側から攻撃されている。しかし、他の政治家にないクリーンなイメージを持ち、最有力候補者に挙げられている。

あと1か月ほどの期間に選挙戦がどのように展開していくのか大いに興味あるところである。近く4人の候補者による大々的な討論会が計画されていて、しばらくは目を離すことが出来ないかもしれない。しかし、筆者は3月末から5月上旬まで日本に一時帰国するために選挙情勢を十分知ることが出来なくなるのが残念である。現在はインターネットで知ることが出来るので、幾分かは分かるであろう。

**‘わりい’は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしく願います。尚、新年度の会費の納入は、4月一杯に願います。また、新入会を歓迎します。**

**年会費：1500円 入会金なし  
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わりい’**

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わりい’の活動の全てに参加できます。

**問合せ：042-734-5100(事務局)**

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田市各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

日本人のスリランカ・カレー史を辿ってみると、1886年に日本人の僧「釈興然」、1年遅れて「釈宗演」らが留学生としてセイロンでの生活を体験し、カレーの食文化に触れている。それ以前の1873年、大久保利通使節団、1900年には夏目漱石もセイロンでカレーを食べたという記録が残されている。

私とスリランカのカレーのそもそものなれ初めは、日本スリランカ仏教センター・蘭華寺<sup>注</sup>)とご縁が深かった中里法海師から「佐原のカレーは絶品ですよ。タッパーを持参してカレーをいただいて帰りなさいよ」と勧められたことに始まる。パサパサしたライスと野菜、魚肉などの何種類かのカレーがセットになって供され、日本のカレーライスとはかなり違っていた。並べられたそれらのカレー料理を自らの好みに合わせて皿に取り分け、皿の上でライスを混ぜて自分の味をつくって頂くのだ。親指で押し出すように口に入れるのが、スリランカスタイルである。箸や西欧のフォーク、スプーン、ナイフに比べて自然体の食べ方であるが、馴れないと結構難しい。

これまでに私が訪れたカレー<sup>けん</sup>圏の国々は、スリランカと同じ作法で食事をされる。カレーそのものの味は、トマト味が効いていたり、スパイスの分量と種類の組み合わせなど千差万別であったが、どのカレー料理でもそれなりに食が進んだ。スリランカ・カレーは、インドに比べてマイルドでソフトであるというのが、私の印象である。

その頃、蘭華寺に滞在されていたらっしゃったタランガッレ・ソーマシリ師との絆が強くなるに従って、私の中のスリランカ・カレーは、ソーマシリ師の手作りで決まってしまった。

### お母さんの味

スリランカ人の食生活は明けても暮れてもカレー、カレー、カレーである。日本人の私から観ると、よくもまあ、<sup>あ</sup>厭きないものだと驚かされる。然し、毎回微妙な味の世界を堪能しているらしい。北海道の8割程度の面積の中に、タミール人とシンハラ人のカレー味がある。前者はギーという油を使い、後者はココナツミルクとオイルで、味付にはかつを節が不可欠である。

タミール人とシンハラ人は争い乍らも共生し、両者の文化が融合して今あるスリランカ文化を創り上げてきた。食文化でも相互に影響を与え合っている。どちらのカレー料理も美味しい。

さて、僧侶の食事は施食制度に依っているが、スリランカと日本を往来するソーマシリ師は、手作りを余儀なくされる。師は手際よく料理をされしかも味は実に決まっている。私にとっては究極のカレー料理である。

「どうしてそんなに上手に作れるの？」

「子どもの頃、お母さんの作り方をじっと観ていたんだ」なる程、やっぱりそうなのだ。スリランカに行って「最も美味しいカレーは？」と問えば、誰もが答える「お母さん(アンマ)の味」である。

### ダーナの風景

ダーナは日本語訳で「布施」を意味する。信徒が僧侶に財物を施すことや食を差し上げることである。これに報いるために僧侶が法を説くことも布施である。スリランカでの施食は勿論ライスとカレーである。スリランカで通常ダーナと云う時は、施食がメインイメージであり、僧侶へのダーナは命をつなぐ施しが大半を占めている。

私が初めてスリランカ・ガンパハ市のサマハ・ヴィハラヤ(ヴィハラヤは寺院の意 日本名・平和寺)を訪れた2012年3月21日に、スリランカの法要儀礼に接した。

「これからダーナがあるので加わられますか」

と誘われて、境内に在る蓮華学舎2階のフロアに入った。読経後に70人余の僧侶達に食事の布施が行われようとしていた。午前11時30分頃である。近隣の高僧やサマハ・ヴィハラヤの僧侶たち及び養育学校の生徒たちに至るまで、ご招待を受けるらしい。

日本仏教で法要が営まれる際は精進料理を頂きながら故人を偲ぶが、スリランカでは何処へ行ってもカレー尽しである。机を前にして座された僧侶各自の皿に、檀家信徒たちの手づくりの一品、一品がのせられていく。私も僧侶たちの後に続いて並び、エビカレーを皿にのせて頂いた。仮にそのカレーを望まないならば、僧侶たちは片手を皿にかぶせる仕草(しぐさ)でお

断りを表わしていた。カレーは30種位あり、デザート、アイスクリーム、飲み物まであった。「このような立派な法要は誰の為なのかしら?」と思っていたら、当寺院住職ソーマシリ師のご両親や亡くなられた弟さんの為であった。師が多くの人々の信頼を一身に集めて蓮華道(ほとけのみち)を歩いていらっしゃる証しであると感じた。徳の高い僧侶に布施をすることで功德を重ねることは最も大きな善行となり、死後は天界に生まれ安楽な生活が得られるのだ。

その布施の折、ソーマシリ師は「サンギカダーナ」について話されたが、現世の幸福は前世の業によって支配される。即ち、輪廻転生の教えが込められた話であ

る。施しを受けることと、そのお礼として僧侶が法を説くことは密接不離である。法話によって人々は心を豊かにさせ、善を行う慶びへと導かれる。法話は厳かにしてそれを聞くものが仏様に近づく第一歩でもある。私にとってダーナ風景は異文化体験として貴重であった。

■注) 蘭華寺は日本国内における唯一のスリランカ寺院。創建は1988年。パナガラ・ウパティッサ師を責任者として1988年に仏舎利と共に来日し、都内で借家生活をしながら小乗仏教活動を開始した。現在は千葉県佐原市に活動拠点を移す。その主な活動は、全国の仏閣や団体を回り法話を通して正しい仏教の導きの布教活動をしている。

(蘭華寺ホームページより抜粋)

### 【トピックス】香取の蘭華寺でカレー料理

一昨年の秋、立川で開催中だった友人の個展で、スリランカの僧侶・ソーマシリ師に出会った事を‘わんりい’のどこかで書いたが、その時に、師のカレー料理はとても美味しく、旅行会社が佐原方面のツアー企画にスリランカ寺院・蘭華寺をコースに加えてお昼を頂くというようなこともあったと聞いた。

ソーマシリ師は、スリランカのコロombo郊外にある平和寺の住職であるが、在日スリランカ人への布教活動などで、両国を行ったり来たりとのことだ。その時はスリランカへ帰国される直前で、次の来日の折に師のカレー料理を頂いてみたいと約束した。



昨年3月末、師は「はだしのゲン」のスリランカ語訳出版記念で一度来日されたが直ぐ帰国、10月にはスリランカ・西部州の最高位僧正となられて身辺

がお忙しくなられ来日が延びた。が、今年1月末に師から突然、「今、日本にいます」の電話を頂いた。

急遽、我が家周辺の‘わんりい’関係の有志メンバーで香取の蘭華寺を訪問し、や

っと念願の師のスリランカカレーを味わうことができた。大僧正になられたが高ぶらず気さくな方で、「町田でカレー料理を皆さんに教えて頂きたい」とお願いした。若しかしたら、スリランカ仏教の大僧正によるスリランカカレー料理の会が実現するかもだ。(田井 記)

#### ◆わんりいの催し 中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音! 中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう!!

- ▲4月の講座: 17日(日) ▲5月の講座: 15日(日)
- ▲場所: 4月会場、まちだ中央公民館 第3・4学習室  
5月会場、まちだ中央公民館 第7学習室8F
- ▲時間: 10:00~11:30
- ▲講師: 植田渥雄先生  
(現桜美林大学孔子学院講師)
- ▲会費: 1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲定員: 20名(原則として)



\*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み: ☎090-1425-0472(寺西)  
E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)

#### ◆わんりいの催し ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!

あなたも私も笑顔が美しくなる! 身体の力を抜いて、気持よく発声しよう!!

- ▲4月の講座: 26日(火) まちだ中央公民館・音楽室I
- ▲5月の講座: 24日(火) まちだ中央公民館・視聴覚室
- ▲時間: 10:00~11:30
- ★動きやすい服装でご参加ください

- 練習曲: 「ひとつの種」
- 講師: Emmé(歌手)
- 会費: 1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- 定員: 15名(原則として)



◆申込み: ☎042-735-7187(鈴木)  
E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp(わんりい)

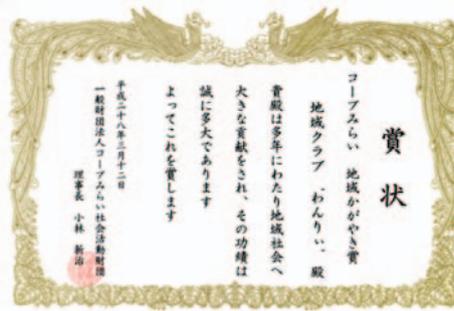
## ‘わんりい’ がコープみらい地域かがやき賞を受賞

‘わんりい’事務局がある鶴川地区に「コープみらい」のミニ店舗（1990年開店当時は、こーぷとうきょう）があります。会のメンバー7名が開店当初よりの会員であることから、‘わんりい’は利益を追求しないボランティア団体として、15年ほど前より折々の活動で、活動資金の一部に助成を頂いていました。

その後、コープとうきょうによる助成の対象団体は、①食、②教育、③福祉、④国際、⑤環境、⑥地域、⑦趣味の7ジャンルの内の一つを活動目的に決め、コープクラブ〇〇の名称による登録制になりました。コープとうきょう会員7名が、コープクラブ‘わんりい’の名により平和と国際交流活動を活動目的に登録しました。

コープとうきょうは、2013年3月、ちばコープ・さいたまコープと合併して新たに「コープみらい」として生まれ変わり、コープクラブも昨年度より、コープみらい・地域クラブに名称が変わりました。共に活動する非コープ会員も地域クラブメンバーとして加わることが可能になり、改めて「コープみらい地域クラブ・‘わんりい’」として登録しました。登録によって、年間5事業、各5000円（年間25,000円）と年間10000円までの会場費助成の他活動のPRなどに力を貸して頂いています。

東京・千葉・埼玉に跨る「コープみらい」は、参加者数約300万人の日本最大の生協となりました。消費者の食の安全・地域の活性化・高齢者福祉・こども子育て支援等、組合員のための諸活動を行う中で、2015年6月、コープみらい財団が設立され、社会貢



献活動顕彰・助成事業、社会活動主体の事業、環境保全事業、被災地支援事業に取り組んでいます。

実は、コープみらい財団の設立や上記の事業についてきちんとした認識を持っておりませんでした。昨年10月、コープみらい7ブロック（町田・八王子・多摩他）地区委員会から、「コープみらい財団が第2回の社会貢献活動の顕彰を行う。‘わんりい’の活動も十分な資格があると思うので応募してはどうか」とのお勧めを頂きました。応募した57団体の中から15団体が選ばれ、はからずもその内の1団体として、「コープみらい地域クラブ・‘わんりい’」が地域かがやき賞受賞との通知を頂きました。

3月12日（土）、コープみらいかがやき大賞・コープみらい地域かがやき賞の合同表彰式が、コーププラザ秋葉原会議室で開催され、表彰団体から、37名の関係者（‘わんりい’からは、田井、寺西、有為楠）が出席して行われ、賞状と副賞20万円が授与されました。更に、地域かがやき賞の15団体の中から、「上総掘りをつたえる会（発展途上国の水不足地域で井戸を掘る活動をする）」、「高齢者への給食事業を続けるーライフアップサポート」、「視覚障害者を支援するー視覚障害者パソコンアシストネットワーク」の3団体がコープみらいかがやき大賞に選ばれました。

コープみらい財団理事長の祝辞に続く選考委員会による「賞の選考基準」についてのコメントによれば、受賞団体の選考を団体の継続期間と将来性、公益性においたとのこと。今回、当会への表彰対象団体名はコープみらい地域クラブ・‘わんりい’ですが、受賞は‘わんりい’会員が長年に亘って協力し活動してきた‘日中文化交流市民サークル’への評価といえます。会員諸氏へ感謝申し上げると共に喜びを分かち合いたいと思います。そして今後、受賞に応じて副賞の20万円を有効に生かし、‘わんりい’の活動目標にふさわしい活動に活用したいと考えています。今後とも皆様のご協力をお願いいたします。

（報告：‘わんりい’事務局）



## 中国・義烏市でパン作りの指導をする I

杣野 一

義烏市は中国浙江省の中央にあり、省都の杭州から車で約2時間、上海からは4時間30分ほどのところにあります。2004年7月下旬、初めて義烏に行きました。行って知ったことは、義烏は先ず商人の町だということです。日用品の卸売市場があちこちにあり、世界的な日用品取引の中心地といわれているようですが、もともとは日本の近江商人のように天秤棒を担いで物々交換による商売から発展して来たのだそうです。昔の日本の子守歌の歌詞に、'でんでん太鼓と笙の笛'とありますが、そのでんでん太鼓の発祥の地も義烏と知ってびっくりしたりしました。

ところで、私が義烏に行った理由は、中国の友人からその義烏に新しく出来る「海洋ホテル」で美味しい日本のパンを作って欲しいと頼まれていたことによります。「8月にホテルが完成するので、中国に来るよ」にとの連絡がその友人から届き、私は友人のマンションがある杭州に向かい友人宅に行きました。そして、その友人から私の居室として案内されたのは、なんと、竣工したばかりの、まだ湯気がほやほや立っているようなマンションの部屋でした。私は中国の友人の温かな心遣いを嬉しく思ったものです。

しかし、ここからが大変でした。早速ホテルがある義烏に連れて行かれ18階建てのビルの威容に目を見張りましたが、なんと内装はほとんど完成していない



パン作りの指導を頼まれた義烏の「海洋ホテル」

のでした。中国では列車の遅れなどはよく経験しましたが、完成間際という呼ばれたホテルの状態には唖然としました。そのような事情で、内装工事が終わるまでは杭州の名所めぐりでもしようと思い、西湖、六和塔、靈陰寺、花港公園、西冷印社などを巡る機会になり、それなりに楽しい日々を送りました。

8月初頭、義烏に再び行き、ホテル従業員の為に建てられた社員宿舎に入り、先ずはというので義烏の有名ホテルの朝のバイキングを試食して回りました。特にパンの味には注意し、又どのような種類のパンが並ぶのかなどを調べながら2週間が経ちました。その間にパンを焼く材料選びもしたのですが、当時の中国でこの材料選びはなかなか至難の業でした。しかし、これらの準備を続けながら、たった一人の日本人パン職人として改めて日本の美味しいパンを中国に紹介し根付かせたいと心に決めたのでした。 (続く)

### 《'わんりい' 掲示板 I》

フランスで活躍中の二胡演奏家・果敢が初来日! 中国古来の悠久の音色の世界へのいざない

二胡リサイタル2016 <sup>グオガン</sup> 果敢 GUO GAN 果敢オフィシャル HP : <http://www.guogan.fr/>

- ▲ 2016年4月8日(金) Guest : 戴茜(古筝) Tomomi(二胡)
- ▲ 成城ホール(多目的ホール) 世田谷区成城6-2-1/小田急線「成城学園前駅」下車徒歩4分  
19:00開演(18:00開場) ☎03-3482-1313 <https://seijohall.jp/index.html>
- 参加費 : 4,000円(当日 : 4,500円)全席自由
- ◆ 問合せ & 申込 : ☎080-5460-8710(崔貞) E-MAIL: jane\_syjp@yahoo.co.jp
- ◆ 主催 : Guo Gan ErHu Club/Dai Qian.info



【2016年4月定例会/5月号おたより発送日と場所】 ◆ 問合せ : ☎042-734-5100(わんりい)

- 4月定例会、4月12日(火) 13:30 ~
- 5月号おたより発送日、4月29日(金) 10:30 ~
- 場所 : 三輪センター・第三会議室

\*おたより発送日は、お弁当をご持参ください

**'わんりい' 料理の会 日本の太海苔巻と中国のお焼きの教えっこ!**

\*いろいろな具を巻いた彩り綺麗な太海苔巻を巻いてみよう!

\*気軽に焼けてとても美味しい中国のお焼き・「糖酥餅」と「金絲餅」は中国のお母さんの味!

❖太海苔巻講師：山田賀世さん ❖中国のお焼き講師：吳 躍鳳さん(イエリンさんのお母さんです)

●会場：三輪コミュニティセンター・第2・第3会議室(調理設備あります)(町田市三輪緑山4-14-1)  
小田急線鶴川駅から神奈中バス、4番乗場から08系統、緑山住宅循環「ゆりの木通り」下車徒歩5分



2016年4月10日(日) 10:30 ~ 14:00(予定)

●定員：先着15名(どなたでも参加できます)

●参加費：1500円(会場費・材料費・講師代) ※留学生無料 ◆申込と問合せ：☎042-734-5100 'わんりい'



**'わんりい' 料理の会 誰でもできる彩り華やかなキャラクター弁当を作ってみよう!!**

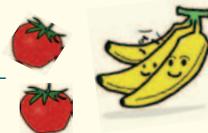
叶霖(イエリン)さんと一緒に作る楽しいお弁当 まちだ中央公民館6F・料理室

2016年5月17日(火) 11:00 ~ 14:00

\*お弁当を彩る素材の変身術を身につけよう!

\*男の子用・女の子用のお弁当を実際に詰めてお土産にします

\*お弁当向きのおかず2種類を試食。スープ、サラダ付き



●参加会費：1,500円(講師謝礼 材料費 お土産用の弁当箱代 昼食代) ※留学生は無料

●募集人数：15名(最多20名) ●持ち物：エプロン、筆記用具

◆申込みと問合せ：☎042-734-5100 'わんりい' E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

**初心者のための水墨画教室**

【鶴川水墨画教室】体験のお誘い



生徒のレベルと個性に応じた適切な指導を体験してみませんか。季節に応じて身近な風物を描ける楽しさを味わえます。

●講師：満柏(日中水墨協会会長)

●場所：市民センター(駐車場有)

〒195-0062 東京都町田市大蔵町1981-4

●曜日・時間：毎月第2、第4(月) 14:00 ~ 16:00

●体験参加費：1000円、見学：無料

●問合せ：野島 ☎042-735-6135

**【工学院大学 孔子学院サロン】**

歌で革命に挑んだ男 ~中国国家作曲家聶耳と日本~

♪お話と聶耳作品 CD ミニコンサート♪

**先着50名に当日使用のCDをプレゼント!**

日本に亡命中、23歳の若さで湘南の海で逝った音楽家の軌跡と彼の多彩な作品10曲余を解説付きで紹介

●2016年4月16日(土) 14:00~16:00

●講師：岡崎雄児(元中京学院大学教授)

日中関係論・中国経済論。2015年6月、上記表題書籍を新評論社より刊行「神奈川の中の中国」他の著書もある

●会場：工学院大学・孔子学院(新宿キャンパス中層棟4F)

JR.小田急「新宿駅」西口下車徒歩5分 新宿京王プラザホテル手前

※参加無料 ※申込不要 ◆問合せ：☎03-3340-1457

**使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!**

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついででの折に田井にお渡し下さい。

**'わんりい' 212号の主な目次**

北京雑感102 囲いの内と外 .....	2
論語断片⑩人知らずして慍みず、亦た君子ならずや .....	3
媛媛讲故事(83)「蛇の話」 .....	4
活動報告「アルジェリア料理の会」 .....	6
諺・慣用語(48)「のるか反るか・破釜沈舟」 .....	7
元寇と鷹島(6) .....	8
混迷の時代を開くザメンホフの人類主義II .....	0
東西文明の比較(3) .....	12
絵本「白鳥」 .....	14
フィリピン滞在記⑩5月は「恋の季節」ならぬ「政治の季節」 .....	18
スリランカ紀行⑦「私の中のスリランカカレー」 .....	20
'わんりい'が「コープみらい地域かがやき賞」受賞の報告 .....	22
中国・義烏でパン作りの指導をするI .....	23
'わんりい' 掲示板 .....	23・24

●「漢詩の会」「ボイストレの会」の案内は、21pに掲載しました。定例会・'わんりい' 発送日は23Pです。